

木代喜司会長挨拶



こどもの絵を読む会



講演テロップ

幼年美術

604

2019 9 月 号

発行所 大阪府東大阪市長田中4丁目6-3
ぺんてる(株)大阪支社内

全国幼年美術の会 〒577-0013 ☎ (06)6747-1601

発行人 木代喜司

年間購読料 3,000円 1部300円（送料込み）

第56回 全国幼年美術の会 夏季大学 特集



実技K（四国幼美）
自然の素材を 竹の音を楽しむ

今回は、保育者を目指す学生が造形を通して地域にかかるお話をします。

今回の行燈絵制作を通じて、保育者を目指す学生たちが地域理解とともに、そのよさを今後の保育者として子どもに伝えることを是非ともしてほしいと考えます。さらに地域情報発信の役割だけでなく、学生たちの作品に灯された一つひとつとの光の温かさが、鑑賞する皆様の心へ届いてくれたら幸いです。

日頃、幼児を中心として造形ワークショップに取り組んでいる学生たちですが、個別の作品で地域と関わることは体験することが少なく、制作する学生たちは緊張して取り組んでいるようでした。町内から与えられた障子紙（画面サイズ28×20センチ）に、「私たちが誇る日本、そして京都のよさを、絵と言葉で表現する」をテーマに制作を行いました。



全国幼年美術の会 監事 矢野 肇

卷頭言



第56回 全国幼年美術の会 夏季大学

8月3日(土)、京都市伏見区のある龍谷大学深草キャンパス2号館において、第56回夏季大学が開催されました。全国からこども園、保育所(園)、幼稚園、小学校の先生方を中心に約200名、会場である龍谷大学の短期大学部こども教育学科1回生130名の学生、その他来賓・スタッフを合わせて350名近くの参加者と共に、大変猛暑の中ではありました。本年も活気溢れる、有意義な発見や学びの一日本となりました。

午前中は実技研修を11講座に分かれて実施。大会開催数日前に、一講

座の担当者が体調を崩し、同講座の希望者を急遽、他の講座に移動願うハピニングもありましたが、事務局の迅速な対応のお陰で、何とか凌ぐことは出来ました。ただ、事前にお申し込みいただいた方々、急遽参加人数が増えて各講座担当者には、大変ご迷惑をおかけしました。この場を借りて、お詫び申しあげます。それでも各教室からは、楽しそうな歓声が聞こえてまいりました。詳細は、次号も含めて、報告させていただきまます。

講演は、清田哲男(岡山大学)先生から、「やさしさで考える造形教

育」子どもが夢を叶える場所」を講題に、昨年出版されました『子ども絵の世界~絵から読み取る発達の道筋とその指導』(日本文教出版)での事例や、その他多くの事例を通しながら、ユーモアたっぷりに、発達の道筋に沿いながら、子どもの絵のもう可能性や、その独自世界の素晴らしさに、会場全体を誘つてくださいました。

昼休み後の全体会では、木代喜司会長からのご挨拶、来賓で会場を提供いただく、龍谷大学副学長の藤原直仁先生、毎年物心両面に渡るご支援をいただく、(株)代表取締役社長の和田優様から、温かいメッセージを頂戴しました。

午後からは、「絵を読む会」が実施されました。幼美が幼美と名乗ることで出来ました。ただ、事前にお申し込んだ方々、急遽参加の全ての時間を使つて実施されました。じっくり時間をかけ、絵を通して、こどものこと、保育・教育のこと、様々な背景に思いを致しながら話合いがなされました。これに向けて、ここ数年来、前日の夕方より、「幼美ミーティング」と銘打つて、絵を読む会の助言・進行にあたる各地区のスタッフの研修会を実施しています。まだまだ問題や課題がありますが、参加者と「共に学ぶ」スタッフとして、如何にあるべきか、又、子どもの絵を通した学びをもとと深めています。同じく、努力してまいります。運営面でも、過年度の反省から種々試みています。まだまだ課題もありますが、反省と試みの、弛みない繰り返しに努めて参ります。又、お声をお寄せください。参加者にとつての学びの場の堅持、日頃の活動の鏡となり、「こどもに学ぶ」姿勢への再スタートとなる環境作りに励みます。ありがとうございます。

(羽溪)

実技研修A [全国幼年美術の会]

実技研修

指導担当…矢野 真

補助…西田恵梨子
記録…新海 風花

木に触れよう、木でおそぼう!

実技研修A [全国幼年美術の会]
木に触れよう、木でおそぼう!

指導担当…矢野 真
補助…西田恵梨子
記録…新海 風花

今回の実技研修では、マツ・スギ・ヒバ・ヒノキ・クスの五つの木を用いて、木の「香り」に焦点を置いた活動を行った。

手に取り、それぞれの木の違いを観察した。全ての種類を見分けるのは難しく悩んでいる様子だったが、五つの木がそれぞれ何の木なのか、木目や色を見たり、香りを嗅いだりして熱心に考えていました。木を削ると香りが良くなることを知ると、木を削つてより木の香りを感じようとする姿も窺えた。

次に、自分の一番好きな木を選び、好きな形に削っていく工程では、マツを選んだ人は4人、スギが3人、ヒバが2人、ヒノキが9人、クスが3人とヒノキが大人気であった。自分が削りたい形に熱心に削る姿が窺え、時折、磨いたところの感触を確かめていました。スギは空気を浄化し、ヒノキはムカデ対策となる等の木の特徴を知り、感心する姿も見られた。木のペンダントが完成すると、作ったペンダントを実際に首に掛けている姿や、木の加工の仕方を尋ねる姿が見られ、木に関する興味や関心が高まっていたように感じた。今回の研修で、「木育」についての理解を深め、実際の保育現場において子どもが木と関わる機会が増えることにより、子ども同士が共感する機会の増加や、豊かな感性を育むことに繋がることを期待する。

実技研修B 「東北幼年美術の会」
世界一美しい色水あそび
～光を生かした造形表現活動～

指導担当…相馬 亮
 補助…高坂麻衣子
 記録…小山 結衣

実技研修Bでは、「世界一美しい色水遊び～光を生かした造形表現活動」を行いました。



色水づくりの後には、光を用いて、投影される色の光の美しさを感じる活動を行いました。まずは、屋外へと向かい、自然光で映し出される美しい色の光を楽しみました。その後また教室へと戻り、暗幕を引いた教室で、準備した懐中電灯を使用した活動を行いました。クリアカップに入った色水に懐中電灯の光を当てると、机上の白い画用紙に光の線が浮かび上ります。光を交差させ色の混色を楽しんだり、クリアカップの底から天井へ向かって光を当て、色水が動くとともに、ゆらゆらと光の波が浮かび上がることを試したりする中で、様々な遊びを発見する喜びを感じていました。

プリンタインクを使用した色水は、絵の具の代わりに絵を描いたり、紙

動」という活動を行いました。までは、15分ほど簡単な「色彩学」を学び、色彩の基本的な知識や日常生活における色の重要性について理解を深めました。

その後には、プリンタインク(C.I.)を使用し、色水づくりから行いました。プリンタインクで作る色水は、透明度、混色の美しさ、沈殿や変色のない高い耐性など、植物の汁や食紅を使用した色水とは異なった様々な利点を多くの参加者が理解して下さったように感じます。

色水づくりの後には、光を用いて、投影される色の光の美しさを感じる活動を行いました。まずは、屋外へと向かい、自然光で映し出される美しい色の光を楽しみました。その後また教室へと戻り、暗幕を引いた教室で、準備した懐中電灯を使用した活動を行いました。クリアカップに入った色水に懐中電灯の光を当てる

や布を染めたりと、様々な活用方法がありますので、ぜひ先生方がご自身で「発展させた新しい活動」を試していただければ幸いです。

実技研修D 「三重幼年美術の会」

美術と科学と音楽のトリプルコラボレーション 「七色の声を出すペット作り」 -10分でできるECOおもちゃ-

指導担当…池村 進

補助…谷岡経津子
 記録…池村智津子

①音とは②声とは③音声とはについて、造形美術や音楽が伴う科学遊びを楽しみながら学んだ。グループに分かれて紐やストローや水の量など実際に試したり、考え方合って楽器を作成。6グループの発表は、それぞれに工夫が溢れるもので物語にしての発表も見られた。工夫次第で様々な世界を体験できる夢いっぱいの遊びだ。園に帰つたらぜひ子どもたちと楽しみたいと好評であった。



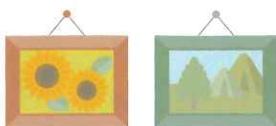
保育者自身が、このような科学遊びに关心を抱くことが、子どもの遊び心や科学的な芽生えを育み、表現活動を活発にして、様々なことへの意欲や生きる力にもつながるとの指導講師の話があった。最後に講師手作りのパソコンソフトでパソコンにストローをつなぎ、ストローを吹いて一定の高さまで吹き上げると子どもの笑顔が現われ、画面いっぱいに子どもの笑顔が溢れると、歓声が上がった。

絵を読む会

担当 相馬

尚經學院大學

絵を読む会（い）では、大変質の高い学びの時間が展開されました。参加された先生方だけでなく、学生の皆さんも含め、高い意欲や学ぼうという強いやる気が感じられ、受け身ではなく皆身を乗り出して参加されていました。



また、作品提供してくださいさつた先生方も子どもの姿を確實に言葉にしながら、作品について丁寧にお話くださいました。参加された先生方からも積極的に質問や感想が飛び交い、活発な意見交換を行うことができました。

絵を読む今

絵を読む会

担当・秋山道広

(三) 運送(二)

『美育文化ポケット』の編集に携

『美育文化ポケット』の編集に携わり、全国各園の素敵な保育実践から生まれる絵を掲載させて頂いていた関係で、読む会において、多くの先生方の見方や悩みを直に聞けたことが大変大きな収穫となりました。愛おしそうに絵が生まれた経緯をお話しさせていただきながらも、その悩みとして指導の不安や置かれた状況の打開策を皆強く求めておられました。今回、改めて会の意義と継続の必要性を強く感じました。

絵を読む会は

担当 福田 尚子
(ぶどうの木保育園)

乳児クラスの絵の中で、年齢、発達に合わせ子どもが腕を動かしやすい状態で描くことができるよう、テーブルの高さであったり紙の大きさであつたりバス、ペンを用意している園があり、一人一人が表現やすいように工夫されているところが印象的である。

あとがき

おられる保育士の姿勢を感じる。描くことが得意でない子どもに対して、保育士が見本を描いて見せるという園もあり、絵は結果ではなくプロセスである、「絵描き」を育てているのではない、表現するなかで人格形成していくので、その子の今を認めてあげましょう…というアドバイスをもらう。

絵を読む会
担当：黄瀬 重義
(滋賀幼美)

保育の現場の中で子どもがどういうう場でどんな風に描いていたかを聞けたことがよかつた。特に乳児のなぐり書きの絵が印象に残った。小さな手からはみ出るクレヨンを持ち、トントン叩いたり、左右に手を動かしたりした跡が紙に残つていて、その子の夢中がこの絵にはある。この夢中をずっと守つていく活動と環境をどうつくつしていくのか、年齢ごとに絵を見ていきながら話し合いが深まつた。



毎日、精一杯 こどもに向き合う先生方と、様々
な場面でお話を伺うとき、その背景にあるものは
描画だけではない、ある共通したものがあるよう
な気がします。そう気にする私自身も、決して例
外ではありません。

それは、「こどもは未熟であり、大人は正解を
教え導くものだ」という囚われは、こどもの、そし
て大人自身の持つ力を弱め、ときには奪つてしま
うことにつながっていく」というものです。

こどもの有する力を信じることは、根源的に人
が持つ力を信じることであり、それは自分自身を
信じることであり、そうした人がつくる未来には
希望を抱ける、たまではあります、が、こども達の活
動の輪に参加させてもらうと、大人が考えつきも
しない行為が、そして表現が次々と展開されてい
く姿を目の当たりにしました。

先日も、ある筆で別の筆に色を塗り、絵具の塗
られた筆を別の筆で転がして描いたり、パケツを
たつおり入った赤水で、台所にあるスポンジを浸
して、それを壁に投げつけて遊んでいると、最初
は投げることだけに興じていたのが、今度はその
スポンジから飛び散る絵の具の軌跡を楽しんで描
いたり、塗つたりしていました。特に教えてもら
わず、ある意味教えられないからこそ、子どもた
ちは身の回りのモノの可能性を手探りで探し、そこから自分の表現を自らの営みを通して描
いたり、身の回りにありました。特別に教えてもら
ず、ある意味「道具はあなたに」とどう使ってくだ
さい」と言っているのでしょうか?」という投げかけ
を、先の夏季大学での講演で、講師の清田哲男先生
は仰っていました。そして「ことばを話さない
道具たちの間に耳をかたむける」という行
為が、やさしい造形教育のポイントとしてあげ
おられました。こどもたちはそのことに耳を傾
けつつ、様々な扱い方を駆使しながら、そのもの
に適した関わりを獲得していくます。先の絵の具の
活動でもありましたまでは、こども達は、筆ではなく
い、又、材料・道具を習うこともなく、自分た
ちの関わりのなかから、それぞれの素材や道具の
特性を感じ取り、ことばを話さないモノたちとのこ
とに耳を傾けるという行為を通しながら、関わ
つているいるのです。

大人が真実と思い込んでいるものを、上手に描
かせなくとも、誰が決めたかは定かではない「こ
どもらしい元気で明るい絵」などと、見かけ上の
お絵描きの場などをわざわざ設けなくとも、こど
もたちは大丈夫! といふ、おねらかな氣持ちを
持つことが、何よりも肝要であると思いました。